戦争を知らない児童のために、御祖地区のみなさんから寄稿していただいた貴重な戦争体験記録集です。

御祖小校下
戦争体験記録集

御祖戦争体験記録編集委員会

御祖の戦争体験記録集

はじめに

戦争を知らない子等へ

昭和六年の満州事変以後、昭和二十年八月まで
日本は約十五年間にわたって戦争をしました。
この戦いで、多くの人が傷つき、およそ七百万人の
日本人が死んでいったのです。
わたしたち御祖の校下でもたくさんの人々が
この戦いにまきこまれ、九十人以上の人々が、
遠い異国の地で命をおとされました。
こうした暗く悲しい戦いの日を、再びくりかえさないようにと、
お家の方々がよせてくださったのが、この体験記録集なのです。
これらの記録を読み、学習する中で、
戦いのない明るい世界がやってくるように
みんなの心の中に、強固な平和のとりでをきずいてほしいと思
います。

■日常生活

敗戦の頃

窪田　美津子（当時六歳）

私が学校に入学した年の八月十五日、終戦になりました。

家は、村の一番上の、つまりすぐ山の下にありました。友だちとあそぶには県道まで出ていきます。

十五日はお盆です。友だちとあそんでいると、日本が負けたとの事でしたので、私は小さいながらびっくりしました。家に走って帰り、日本が負けたことを父にはなしました。

終戦になるすこし前、富山県が焼けたのを、近くの山の上まで行って、火の上るのを見ていました。

それからは、秋になると、学校からいなごとりや米の穂をひろいに歩きました。いなごは、煮干のかわりにおつゆの中にいれました。学校の給食は、いつもおつゆだけです。大根、人参、じゃがいも、ねぎ、玉ねぎなど順番に家からだすのです。

冬は、炭の大きなひばちでした。今なら大きなブルが除雪をしてくれますが、昔は誰もどかしてはくれません。広い道でも細い一本道になります。学校が遠いので、ふぶきの時は休んだこともあります。村々では一番遠い人に長ぐつがあたります。それを私ももらいました。それがとてもうれしかった。六年生まではきました。わらぐつをはいてくる人さえいました。

着るものは全部点数でした。ヤミで食物と衣類の交換です。石けん、シャンプーもあまり良くないので、シラミやのみがたくさんいました。どんな事をしても、シラミやのみがいなくならないので、本当に困りました。

家の食べ物はそんなに困りませんでした。それは田畑が少しあったからです。私は一年中食べる米があると思っていたのですが、朝、昼、夜のごはんは、おじやか、さつまいもをいれるか大根の葉を入れて食べるのでした。さつまいも好きでしたが、大根の葉を食べるのは本当にいやでした。

小さい時ですのであまり良くおぼえていません。

戦時中の衣料生活

M子（当時十七歳）

日支事変がたけなわになると、物資のない日本は統制が厳しくなってきました。私はいろいろな統制の中で衣料生活について述べたいと思います。

当時は、今のように店屋へいって、自分の欲しい布は買えませんでした。どんなにお金を出しても売ってくれません。キップ制といって、一人が一年に百点ぐらい与えられました。布を買うたびにキップの帳面を出して指定された点数を切りとってもらうわけです。反物一反買えば二十何点、シャツを買えば十何点、糸を買えば五、六点と、百点はたちまちなくなりました。せっかく買ってもほとんど純綿や正絹はなく、人絹のまじりものばかりで、年頃の娘さんをもった家の親戚は自分の分を嫁の方にまわして嫁入りじたくをしたものでした。だから二、三人女の子をもった家は大変なものでした。

その後、大東亜戦争がぼっ発して、そのすくないキップ制も皆無となりました。国民はつぎをした上にまたつぎをあてたものです。私の姉はキップ制のある頃に嫁ぎましたが、私の頃は全くあわれなものでした。

母が昔、嫁にきた時に持ってきたという細かいかすりや縞模様の着物をもらって、ほどき、もんぺの上に着る標準服というものを作って着たものです。当時は人間が生きていく上に、最も大切な食料品に変わりました。

特にちりめんや正絹の着物、それは母にとって、女の命でもあったのですが、みんな米や芋に変わってしまいました。母の衣装は一家を救う貴重品でありました。私は一枚失うごとに大きなため息をついた母の姿を忘れることはできません。母のタンスの着物がすっかりカラカラになった頃、大東亜戦争は終局となりました。

今の娘さん達には、とうていわかってもらえないことだと思います。

赤紙

前河原　久三郎(当時三十二歳)

昭和十七年十二月十三日、その日も暮れようとしている肌寒い師走の嵐のふいている時に、突然召集令状がきました。赤紙です。十二月二十日沼田連隊に入隊するように書いてありました。赤紙はぜったいに服従です。至上命令です。どうする事もできません。さっそく勤務先大阪日立造船築港工場にその事を申し出て、色々の手続きを終えて帰宅しました。

会社では、出征兵士の家族には六割を支給してくれます。町内会の方々に銃後の事をお願いし、また、色々とはげましの言葉をいただきました。郷里の兄姉に別れを告げる為に一家そろって郷里石川県鹿島郡御祖村曽祢に帰ってきました。曽祢部落の人達は、私等出征兵の為に部落のお宮様に武運長久の祈願をしていただきました。万歳の声に送られて一路沼田へと出発したのでした。兄上様も心配してか沼田まで送りにきて下さいました。

沼田連帯では身体検査も終わりました。いよいよ軍隊生活です。一週間程して軍用列車で門司に到着。そこから船にのり朝鮮釜山に到着しました。時は昭和十八年一月元旦でした。釜山の日本人小学校に一泊しました。室内の温度は五度で、内地とはほとんど変わらない様な気がしました。また、軍用列車にのり、目的地満州へと列車は走っていきます。「おお、緑江」をすぎた頃には、気温も下がってきた様に思われました。いよいよ満州牡丹江駅に到着しました時は夜の十一時でした。列車から降りるととても寒くじっとして居られません。上官の命令で足踏みです。迎えにきてくれた部隊の自動車に分乗して、目的地の部隊に到着しました。満州第三一〇六隊です。いよいよ関東軍の精鋭となるべく軍事訓練を受けなければなりません。中隊の新兵さんは、皆赤紙で召集された人でした。石川県の人、富山県の人、長野県の人です。長野県の人は一番若く、数え年で二十二歳。富山県の人は二十八歳、石川県の人は三十三歳でしたが、年齢に関係なく厳しい軍隊生活（迫恵砲）を受けなければなりません。また、召集前の職業の如何にかかわらずです。そして、一年半の満州での軍隊生活もなれた頃、部隊は南方方面に出動することになりました。場所は、沖縄県宮古郡宮古島でした。

中隊長の訓示では、敵は、沖縄本島か、宮古島、または石垣島のうちどの島かをねらって上陸するつもりにいるらしいから、島の防備に万全であるように、また、死守するように島に敵を上陸させない様にと命ぜられ、島は、敵の艦砲射撃、また、空襲をうけ、幾多の戦友も戦死しながら終戦になりました。

残念ながら日本は負けたのです。時に、昭和二十年八月十五日でした。天皇陛下の為、国の為にと、赤紙一枚、召集令状一枚で国民は喜んで戦争に参加し、戦死していったのです。

そのように教育されてきた時代でした。

① 日常生活

中橋　太郎九（当時三十二歳）

今を去る事三十四、五年前、まさに世界は暗黒と化し、大本営発表は戦争に入れり。

時の総理大臣東條内閣は軍隊の大将なり。全国民を動員して戦地に送り込み、赤紙、空襲、疎開、軍隊輸送、銃後の女子など国民こぞって立ち上がりました。

私等、七尾のほう国造船の工員も、それ船を造れ、やれ飛行機を造れとやっ気になって働きました。農家は米作りで供出米として提供。はたまた寺のつりがねを出せ、家の仏具を出せ、食うものも食わず一生懸命国の為につくしましたが、惜しくも戦争に負けました。

② 終戦

昭和二十年、日本は世界の人達に降伏しました。

さて、それから日本はどうなるか。食料はなく、米粒にさつまいもは一日三本。山から木の芽をとり、それを食べ、着物は金にかえるべく売り払い物を買う。

学校は国民学校と呼ばれた。なぜ、こうした事になったのでしょうか。

③ 政治

国民一人一人の公平なる政治家をえらび、平和な日本をつくりましょう。私達は、国会議員として、最も適切なる人格ある人をえらび、良き日本をつくりましょう。

戦争は恐るべき悪魔です。

日常生活

今井　すゞい（当時二十三歳ころの祖父）

記憶がうすらいでゆく今日この頃ですが、思えば身ぶるいする様なおそろしい思いです。

戦争がはげしくなるにつれて、だいじな息子、父を赤紙で取られ、都会からそれぞれの親類へ疎開にくる人も多く、食べるものも思うようにいかず、毎日米の中に豆、いもを入れて食べたが、それもまずいとも思わなかった。衣類を買うにしてもキップでした。本当になさけない思いでした。婦人会や初めみなそれぞれに千人針なんかていねいにしたこと、色々と思い出が多いことばかりで、どう書けば良いのか、苦しかった戦争中ロには言えない、筆に欠けないです。

戦後三十五年、今は昔のおもかげはなく、毎日がもったいなあと、心の中でうなずくありさまです。

戦時中の食生活

領家　まつ子（当時二十五歳）

私達は、東京で金箔業をしておりましたが、昭和十六年、太平洋戦争がはじまり、主人は戦場へ、私は田舎へきて農業をしました。

だんだんと戦争がはげしくなる故、食べ物はなくなり、ごはんにはなにかまぜないと食べられませんでした。原山へ行ってサツマイモを作ってごはんにまぜたり、ジョブ、モチグサ、カタハなどを入れて食べました。米は作っていても供出しなければなりません。家で食べるのでも、晩にはオカユにして食べなければなりませんでした。実家へ行くにしてもお米をもって行かなければ親子の間でも気がねでした。

砂糖かんは乳児用として、少しは配給がありましたが、私達にはなかなか買えませんでした。

その当時の事は、くわしくいい表わすことはできませんが、もう戦争はこりごりです。

当時の食生活

今井　初枝

昭和十八年四月五日、召集で赤紙を受けとり、戦地に向かって南方で亡くなり、今年で三十年余りすぎました。その間の生活は、どんなものであったかと今の人は思うでしょうね。

食べるものはさつまいも、かぼちゃ、大根などを米とまぜて食べ、空腹をしのいできました。子どもには、ミルクは配給で、腹一杯飲ませる事もできず、甘い物は少しもやる事もできず、着る物も体に合う物を着せられず、つぎ合わせた物、きたない物を着て、どうして命をつなごうかと言う事ばかり考えて、戦地にむかった兵隊さんの事ばかり思って、今日に至った次第です。

今では、敗戦国とは言いながらたのしい生活をしておりますが、戦争を知らぬ子供達はどうなるものでしょう。二度とあのような戦いに会いたくないと思います。

「うちてしやまむ」

糸屋　あつ子（当時八歳）

戦争のはげしくなった頃小学校の入学式でした。母の着物で作ったモンペをはいて、ボール紙のようなランドセルをかつぎ、名札と防空頭巾をもっての登校でした。学校では、毎日朝礼の時、校長先生から戦争の話やら、兵隊さんの話をききました。おさなかった私には理解できませんでした。

校庭は全部さつまいもとじゃがいもが鉄棒の下まで植えてありましたし、防空壕は、校庭の入口にあり、毎日避難訓練をしました。一年生のとき、学校にたくさんお客様がありました。全校生は校庭にならんで、お客様がいました。全校生は校庭にならんでお客様を迎える時、挨拶に、「うちてしやまむ」としたところ、お客様からたいへんほめられました。でも、「うちてしやまむ」とはどんなことなのかわからなかったです。

また、勉強のかわりにドングリをひろったり、ヨモギをとりにいったりしました。登下校の時は、飛行機がくれば土手とかへいにかくれるように、先生からも毎日注意をされました。

夜は、電燈に黒い布をおおい、光がもれないようにしました。かべは黒い色をぬってありました。

空襲警報発令とか、警戒警報発令などはおそろしいことでした。戦争の思い出で忘れられないのは富山県の空襲です。父は戦地です。母と市内からの疎開の子供さんと真っ暗な家にいました。母は私達をカマの中にじっとしているようにいいましたが、こわくてじっとしていられず、母のそばからはなれられなかった事をおぼえています。

大きな音、昼のように明るい空、飛行機が手をのばせば、とどくようにして、私達の家の上を旋回しては、市内の上で爆弾をおとすのをみました。

私の家にも落ちるのかと声も出ないくらいおそろしかったです。夜が明けるのを待って、母は市内の親類へ歩いて出かけました。母に聞いた話ですが、市内は焼け野原だったそうです。死んだ人が道端やら、ミゾにころがっていたり、力つきてすわりこむ人、親にはぐれて、八月というのにわらぐつを片方だけもって、放心したように歩いている小さな子供、老人の死体が何体もあったそうです。親類の人は、富山城の堀の中へつかっていてたすかったそうですが、そこでもたくさんの人達が死んだそうです。

学校は疎開の友達でいっぱいになりました。机もなく、家からもっていった机にゴザをひいて一つの机に三人ずつすわりました。たべるものもなかったし、両親を空襲で失っておじさんの家にあずけられた友達が爆弾で手の指が曲がってしまった友達もいました。あんなにおそろしく悲しい思い出は、自分の子供には絶対させたくありません。小さかった私にはこの位しか記憶にありませんが、悲惨な戦争の犠牲になった多くの人達のことを思う時、戦争の体験記は当時一年生だった私達で終わりにしたいものです。

① 戦時中の食生活

山本　兵四郎（当時二十八歳）

大根、大豆、菜っ葉、じゃがいも、じーぶ、これらの物をごはんに混ぜてよく食べました。それでも、少しも「まずい」と思いませんでした。とくに、じゃがいも、さつまいものおかゆは最高に甘かった。また、さつまいものふかしたのは、今のようかんよりうまかった。

品物不足で全部配給でした。はき物のはなおなどは、ありあわせの布で自分で作って買わなかった。

酒類、たばこ、砂糖などは無く、甘い物はサツマイモで代用しました。たばこは、山のイタドリの葉や茄子の葉などを干して良く吸いました。また、品物によっては、他人と物々交換をもした。

② 空襲

いつでも空襲警報のサイレンが学校の講堂屋上からなりました。その時は必ず防空頭巾をかぶり、又、通学する生徒は防空頭巾をもって登校したものです。

夜は警報がなった時は、黒い布を電燈におおい、同時に、雨戸を締め切り、家中をくらくしました。それからガラス戸のような物は、爆発の震動で破れるので、危険防止の為のガラスに紙テープなど色々なもようにしてはってありました。

戦時中のこと

向田　由美子

私は小さかった為に、戦時中の事は何もおぼえていませんが、母から聞いた食べ物について書きます。

・さつまいもの葉をゆがいて酢のものにする。

・大阪の方から疎開していた人で、かぼちゃの茎や葉を天ぷらにしていた。

・大豆、小豆、さつまいもをごはんに混ぜて食べる。

・砂糖きびの汁を煮つめて飴をつくる。

もち草は見たくても見られず、土手や川ぶち等いたる所に野菜を作ったとのことです。

笑い話の様ですが、日中飛行機が通ると、畠にいた人が鍬をほうりあげて、「こんちきしょー」と怒鳴ったとか、またその飛行機の中から、アメリカ軍のワハハ・・・という笑う声を聞いたとは不思議ですね。飛行機の音の方が大きいと思うのですが・・・。

疎開

島田　弘子（当時十歳）

私が疎開したのは、三年生の時でした。

両親とも別れ学友とも別れて私の母親の親類にあずけられました。父母と別れた時はもう二度と会う事がないとさえ思いました。同級生徒は、ある人は、田舎へ疎開したり、ある人は、集団疎開へと東京からはなれました。私はおかげで東京で空襲に会わずにすみました。

あの終戦の年の春の事でした。父母は空襲で家を焼かれて、顔は真黒になって東京から田舎へ疎開してきました。二度と会われないと思っていた矢先なので、それはうれしくて涙が流れて来て仕方がなかったあの時の思い出は今も忘れることができません。田舎へ疎開した当時は、たださみしくて父母のことを思い出して手紙をかいて出しました。友達とけんかした時は、もう一度東京へ帰りたいと思いました。でも東京の方は、日一日と空襲がはげしくなってくる一方です。私は田舎へ疎開していたので、あのおそろしい空襲にも会わずにすみましたが、父母の話では東京駅まで来る途中には、親子で重なり合って死んでいたり、家はまったく焼けて、ただ金庫がぽつんと残っていたそうです。

今思い出しても、うそのような事です。もう終戦がおわってだんだんとうすらいできましたが、一度体験した事は何年たっても忘れられない思い出です。

あのいまわしい戦争を二度とおこしてはいけないと思います。

赤紙（召集令状）

作者記載なし

戦争体験記と言っても、今から思い出すと、余りにも多くの苦しみ悲しみ等浮かび上って来ますが、その中から私は召集令状について、大変おどろいた事がありましたので、その思い出を綴って見たいと思います。

戦時中の男性は皆、国のため、天皇陛下のために死んでも奉公するという考えで働いて居りました。私もその一人で赤紙の貰う事の覚悟は出来て居りましたが、突然に役場の方より玄関先で私の召集令状と長男（当時十八歳七尾商業学校三年生）の召集令状の二枚を同時に手渡された時には大変おどろきました。

その頃の生活と言うのは、品不足で食物がなく、着る物がなく、先代から営んでいた料理業も営業停止され、芋のつるを食べながら、年寄り夫婦に、妻と十八歳の長男を頭に四人の発育盛りの子供を支えての生活でした。そんな時に私と長男の二人が同時に出征しなければならなかったからであります。

学生の息子は森本の軍需工場へ挺身隊として動員されている最中の召集令状で、早速動員先の息子に知らせてやると喜んで家へ戻り、軍需工場に働きながら航空隊へ志願し、試験に合格して居た事を記し、これで死んで国の為に尽くせると赤紙を見て嬉しがりました。

出征すれば死んで帰るものと信じて居る国民の私にも、その時は若き息子が・・・。また、家に残される女、子供の事を考えたら本当に心配でたまりませんでした。それが私の顔に現れたのか、その私に長男が言うには、

「父さん、今の男の寿命年齢は二十歳なんだ、僕が航空隊へ行って死んでも後に子供がいるから心配することなんかない。心配している場合しゃない。国の為に働こう。」

と、息子の慰めと励ましに決意が出来、私は七尾の防営隊へ、長男は奈良の丹波航空隊へ入隊したものでした。

終戦前後の思い出

藤井　勝美

戦争体験記憶と言われましても私は終戦当時で満六歳でしたから、戦争中より終戦後の混乱した生活の方の記憶の方が強いのです。

当時父親を赤紙で戦争にとられて、昭和十九年に戦死、母親一人の手で子供三人を育てられたのですから、一口に言えない苦しみ、まずしさ、ひさんな生活でした。戦争中はよく空襲警報と言って、ぶきみなサイレンが鳴ると、また飛行機が来たといって、小さくなっていました。夜など電気に黒い布をかけて明りが外にもれないようにして、その下で親子肩をよせ合っていたのを覚えています。

昭和二十一年に小学校へ入学したのですが、当時は入学すると言っても、ランドセルも形だけで、筆入れなどはボール紙に布をはったようなものでした。鉛筆にしたって、少し力を入れるとよく折れました。服装は、上はうわっぱり、下はもんぺといって母親の着物をこわして作り直した物でした。はき物と言えば、げた、あした、わらぞうりでした。遊ぶときなどは、よく素足でかけまわっていたのを覚えています。

食事と言えばいつも混ぜご飯でした。それでも腹いっぱい食べることはできませんでした。春になると山へ、じょうぶの木の芽を取りに行き、それを米に混ぜてたくのです。それからさつまいも、いものつる、じゃがいも、大根の葉、豆と色々混ぜて食べました。米の量より混ぜ物の量の方が多いのです。夜はおかゆでした。それもいもとか、じゃがいもの入ったものでした。ですから、さつまいも、じゃがいもは重要な食物でした。

さつまいもを作るのに各家で原山へ行って、山を開墾して作ったそうです。木の根や笹の根を掘り出し容易なことではなかったそうです。各家庭に三、四枚の畑を作っていました。ですから、日曜日ともなると、山へ行くのが仕事でした。昼の弁当や作物にやる肥料をかついで行くのです。重くなると休んでは、また歩いては、半分ほど行くと「まだか、まだか」と言って畑まで歩いて行ったものです。畑につくと「やっとついた。」と言ってすわったものです。すると母は、「いつまでもすわっとらんと、早く手伝え。」と言って、畑の草をむしらされたものです。少し仕事をしては休み、また少し草をむしり腹がへると「ごはん食べんか。」と昼をさいそくしたものです。仕事がおわり、帰りはたいていたきぎをかついで来たのを覚えています。

今では原山も自然にかけっているけど、当時はほとんど田や畑になっていました。今でも原山へ行くと、ここが畑やったのにと、昔を思い出します。

食料生活

松井　久子（当時二十五歳）

当時のことは、だいぶん忘れましたが、食料事情が大変苦しかったことは忘れられません。米を作っていながら、配給を受けなければならないという非常体制でした。そればかりでなく子ども達に腹一ぱい食べさせたいということで、親は大変苦労し、がまんをしていたようです。じゃがいも、さつまいもの代用食はいうに及ばず、山からじょうぼの葉をとってきて、混ぜごはんをしてもらったり、葉っぱを入れたごはんやおかゆを毎日食べたことを覚えています。時おり菓子の配給だと言って、こぬかで作ったお菓子があたりました。それでも子どものいる家では、大変によろこばれました。

配給という言葉は、今では聞かれなくなりましたが、当時は、酒、はきもの、衣服にいたるまで配給でした。

戦時中のこと

辻森　よしい（当時二十八歳）

太平洋戦争、当時私は二十八歳でした。

昭和十八年、父は軍需工場へ行って飛行機を作る仕事を習いに行っていました。だんだんと仕事ができるようになった時、当然のように父にも赤紙が来て、びっくりしました。けれども、どうにもなりません。その時私には、三人の子どもがいました。小さい子どもを連れた人達は、あちらにもこちらにも多く、皆つらい思いをして戦争に行きました。

昭和十九年八月一日戦死したとの知らせがあり呆然としました。それに食べ物がなくて毎日毎日山や野原で雑草のある中を耕して、かぼちゃ、じゃがいも、さつまいも等をたくさんとれるように、毎日一生懸命に仕事をし、秋になると作った作物をとり入れて、子どもと四人で食べました。

けれども戦争はますますひどくなりましたが、だんだんと子どもの大きくなるのを夢見て、生活をするのに、体もおしまずに働き、今日まで来ました。

戦争の思い出

山下　美代子（当時三十四歳）

私は昭和十五年に生まれましたので戦争のことはわかりませんが、私達兄弟は四人いますが、三人は大阪に育ちました。父は靴屋、母はお手伝いさんだったそうです。戦争がはげしくなるので父は、

「僕は大阪に残るから、母さん達は危ないから子供をつれて田舎の親類の家へいきなさい。」と、言ったそうです。私達の住んでいた所は焼け野原になってしまったそうです。

戦争が終わったので父は母に「大阪にもう一度帰ろう。」と言った所、母は「絶対にいやだ。」と言ったそうです。もし返事していれば私は大阪にいなかったでしょうね。それだけお母さんは苦労したんでしょうね。それで田舎へ帰ってきて男が一人生まれたのです。

私は一年から中学まで今の御祖小中学校にかよいました。毎日が、苦しくつらい暮らしでした。食べ物も着るものもありませんでした。私は姉のお古ばかり着ていました。私達、小学二、三年まではおぼえておりませんが、冬は大きな火ばちでした。給食は何もなくて弁当箱に大根のごはん、さつまいも、大根の葉がいやで、のどもとおりませんでした。お母さんの見ていないすきに、白いごはんばかりよりわけてもっていったおぼえがあります。

日曜日は一家で原山へさつまいも、じゃがいも、大根、豆植えをやらされました。子どもながらも、苦しくていやになるほどでした。けど生活のために頑張りました。学校へ行く時は、防空ずきん、もんぺ、たんぐつをはいて通いました。それに毎日、日曜日には、西東と分けて男女四年生からお宮様と観音様の清掃をしました。

今、昔のことをふりかえってみると、うそのように思います。こういうつらいことは、私たちでもうたくさんです。絶対に戦争をしてほしくありません。

軍需工場で働く

高野　誠人（当時十九、二十歳）

昭和十九年三月、大東亜戦争も戦雲急をつげ、勉強にはげむべき大学生までが、学徒出陣する様になり、国内では徴用令が出され、農業以外の商店の主人などが軍需工場へ徴用される様になった時、私達は東京の商業系の実業学校を卒業し学校からの斡旋で東京都江戸川区にあった皇国第二六一八工場（現在のミヨシ油脂江戸川工場）に勤務する事になった。

当時はどこへ勤めてもどうせ徴用されるから初めから自分の好きな工場へ勤めると言う気持ちの人が多かった。私達の入社した当時は、工場もミヨシ化学江戸川工場と言い、主に石けん、マーガリン、食用油などを作る工場でしたが、軍需工場になってからは、軍略上の都合で工場の名前も番号でよぶ様になり、動物性油脂（くじら、いわし）植物性油脂（大豆、ゴマ、ヒマ、松根油）を特別な精製方法で精製して、航空機エンジン用の潤滑油を製造していました。特にソ連国境方面で使用できる様に冷下三十度まで気温が下がっても凍らない潤滑油なども作っていました。

軍需工場も勤務時間は一日の働く時間が長く又休日も月に二回か、三回しかなかった。

昭和二十年の終戦の年の一月頃から陸軍航空燃料庁から監督官が派遣され、従業員全員が徴用工の適用を受け、中学生小学生（高等科）男女学生まで勤労奉仕のため工場に働きに来る様になった。もちろん八百屋、魚屋、床屋、呉服店の主人なども徴用工として入社し、従業員は一度に二倍以上にもふえた。徴用工になると勝手に会社をやめたり、休んだり出来ず、休日に映画を見に行くにも浅草や成田山など遊びに行く時でも一々、監督官から休日証明書をもらって行く様になり、証明書を持たずに若い人がぶらぶら映画街など歩いていると、警察官や憲兵に尋問や連行されることがあった。

昭和二十年春頃から、B二十九による本土空襲がはげしくなり、特に三月十日（陸軍記念日）東京、五月二十七日（海軍記念日）横浜の大空襲はものすごく、東京は二日も燃えつづけ横浜の時は午後四時頃だったが煙で空が真暗になり、火の粉や灰が東京の空まで飛んで来ました。

八月十五日の正午、全員運動場に集まり、天皇陛下の玉音放送を聞くまで戦争に負けるなどとは知らず、一生けん命に働いて来た勤労女子学生が肩をだき合いながらすすり泣く声が今も耳に残っています。

戦争当時の家庭生活について

高野　良栄（当時三十七歳）

昭和六年六月満州事変が起り、日増しに戦争の範囲が広くなり、やがては上海事変と成り、その内に日支事変とだんだん長期戦に成り、ついに昭和十六年十二月八日には、アメリカのすきに皆さん御承知のハワイの真珠湾を攻撃、その為に日米の太平洋戦争となりました。

我国はあらゆる物には限界があります。あの大国のゆたかなアメリカよりB二十九と言う大きな爆撃機が無限に飛来して爆撃するために東京、大阪はもとより京都を除き、大都市工場等をねらい、人々は家を失い危険この上なく、田舎の知人、親類を頼り、疎開をする人でどこもここも大変でした。高畠の寺へも大阪の守口より小学校の生徒が一部疎開していました。

戦争がはじまると同時に各国共に我国に対して海上閉鎖を致したので、我国は日に日に物が不足し一番に食料に行きつまり都会はもとより、この田舎の農村でも米を作りながらも充分に食べられぬと言う事に追いこまれました。しかし、我々村民は毎日の如く動員令状（赤紙）が友達及び親類と次々と来て、時には五人、時には三人と親、兄弟と別れを惜しみながら出征される姿を見る度に心身もひきしまり、何とも言えぬ気持ちでした。米はもとよりあらゆる品物でも一人一人配給制にて充分どころか、子供の学校用具さえ事欠く有様で当時の父母達の心中思い出すも身ぶるいするくらいです。

当時私は一農民として食糧増産にはげみ政府よりの作付命令に従い、イモ類や麦、米と反別により各自に生産目標を定めて各家の人員により保有量を残して供出致さなければならなかったのであります。もし目標額にとどかぬ家では自分の保有量の中から出さなければ当局より非常にやかましくとりたてられました。今日皆様ご存じのある碁石観光地の原山もあの当時は一面畑に開墾してイモを植えて朝早くから部落の人々、都会より疎開しておられた人も一生けん命でした。あの当時の事を今日の若い人や子供たちは昔話の様に聞く事と思います。あの時を思い、今日の生活は何といって良いかわかりません。この様な時節が何時迄もつづくでしょうか。

私はいつも思います。昔より歴史はくりかえすと言う言葉があります。海にかこまれた孤島の我国は万一の事を思い以前の様なみじめな思いを皆さんにさせぬ様に、又、せぬ様に、今日より自給自立の心がまえが一番大切な事でなかろうかと思います。

赤紙

木村　清子（当時十七歳）

私たちは、病気の母と兄と姉と私の四人家族で、五反歩の田を作り、ほそぼそと暮らしていた。

兄は丙種であった。十九年九月、夕方、家に帰ると、病気の母が赤紙をにぎり泣いていた。明後日、青森入隊の知らせである。皆、ぼうぜんとした。

その当時は、テレビもなく、ラジオすらあまりなかったので、天気予報もわからなかった。その夜、台風がきた。夜が明けて田に行ってみると、大きな稲はぞが三つたおれていた。けれども兄は、そんなこともしていられない。汽車の連絡等を聞きに駅へ行かなければならない。姉はこの時、腹膜炎をおこして床についていた。私はたった一人で、横倒しに倒れたはぞから一束ずつ稲をぬいた。親せきの人たちも後から応援にかけつけてくださりやっと片付いた。

兄は翌日、出兵していった。一週間後に兄からの便りがあった。「今、私たちは〇〇方面に向かいます。元気にいてください。」

汽車の窓から、誰かに拾われるように祈りながら出したハガキだった。

父の戦死

今井　ミチ子（当時四歳～小二年）

私の幼いころのことで小さいながらも覚えていることを書かせていただきます。

一番くやしく思いますのが、戦争で父を亡くしたことです。父は海軍でした。昭和二十年、私が四歳の時、父は南シベリアで戦死いたしました。今は兵庫県においでる父と一緒に船に乗っておりました。友人のお話を聞きますと、敵に爆発され、父は船から海へほうり出されてしまいました。波にのまれながらも、必死になって何かにつかまっているところまでは見ておりましたが、あとは姿がみえなかったそうです。その時の父の姿を想像いたしますと、今でも胸がいたみます。どんなにたすかりたいと思って死んでいかれたことでしょう。いろいろと戦争中の辛かったお話を聞きますと、本当に感動いたします。

父は、人からも好かれ、何でもやり遂げるすばらしい人だったそうです。父は筆まめでそのころ書いた葉書や日記などもたくさん残っておりました。

父によく「かんまんだぶつ」をしてもらって風呂に行ったこと、いろりで昆布を焼いて食べたこと、おにぎりをにいごをひいて父とよく食べたこと・・・など、父との思い出はつきません。

父の面会に行く時、母は大きなトランクを持って会いに来ました。船の中で私は父にだっこされ、それを父はとっても喜んでおりました。その顔が目に見えるようです。これが最後の父との別れになったのです。

戦争がすんで、近所におとうさん方が帰ってこられる姿を母が家の中から窓ごしにそっと見て、泣いていることがたびたびありました。そんな様子を見るたびに、私も母にすがって泣いていたことを思いだします。父もこのように元気な姿で戻ってきてくれたらと、母はどんなにくやしく思ったことでしょう。

それから後、父のいない家族で、どんなに多くの人たちに助けられ、お世話になりましたことやら、母は苦労して、おばあちゃんはじめ、兄と私をよく育ててくれたものです。感謝の気持ちでいっぱいです。

当時は、さつまいもが主食で、たくさんいも畑を作りまして、夏休みになりますと、毎日兄と芋の草むしりに行きました。暑くて、いやでいやでたまらなったものです。ごはんも芋ごはんや菜ごはんをよく食べました。学校の運動会がありましても弁当箱に、いものつる、つんのこ、竹輪の煮つけなどが、せいいっぱいのご馳走でした。おやつもおいしいものがなく、おばあちゃんにいもあめを作っていただいたりすることが最高でした。麦をむいてガムをつくったり、畑のなす、きゅうりなど食べて、おなかをふくらがせていたのです。

学校へは「あしだ」をはいて通いました。皮のカバンやランドセルもなく、手で縫った手さげ袋に教科書を入れていったものです。妹や弟がいる人は、おぶって学校へ行き、子守りをしながら勉強いたしました。まだ、私の一、二年生のころは品物が少なくて、学校では、何でもくじ引きで当てるという始末でした。くじ引きではずれると、友人の持っているものがとても羨ましかったものです。

戦争のために、いろんなことに多くの人たちを悲しませたり、不幸にしてしまったのです。「戦争さえなかったら！」と、父を亡くした私は、本当に残念に思っております。

戦時中と終戦直後

山田　喜一郎（当時四、五歳）

ぼくは幼少のころなどで、あまり記憶はありませんが、仏具（仏壇の中の道具）などの金物類を区長さんの家の前にたくさん置いてあったのを覚えています。後になって聞いた両親の話によると、それらの金物類は、全て兵器にするための供出だときき、いかに物が不足していたか考えさせられます。また、肥料も配給だったらしく区長さんの所に、たくさんの人が寄っていたのを覚えています。

また、食料不足で当時の子供は、今の子供のようにおやつもなく、生のキュウリや、道端のスイトウ、ツバナ等をとっては食べたものです。

また、ある時は、姉と山へ行き、ドングリの実をたくさんとりました。これも後の話によると、学校の生徒はどんぐりをもってくるように言われたことがあったようです。どんぐりから絞り油を取ったとのことです。今になってみると、いかに人海戦術的であったかが考えさせられます。

戦争になると、いかに物が不足するかが、この記憶だけでもよくわかると思います。

夫の出征

宮田（当時二十三歳）

嫁いで三カ月。夫の顔もまだ覚えたか覚えない時に、夫には赤紙がきた。その日から私の家には、六十歳の両親と一町六反の田んぼ、それに畑。どうしていっていいかわからない。杖とたよった夫をとられて、火をふくような生活がはじまりました。お米をとりながらぜんぶ国へおさめ、食べるものはいもとまめ。ほんとうにあわれなものでした。毎日毎日出ていく兵隊さんを思えば、なんのこれしきと後に残ったとしよりと女子供は、愚痴一つこぼすものはありませんでした。みんな心を一つにし、なんとか勝ってもらわねばと思いどんな辛さも忍んできた。そのかいのもなく、負けいくさになった時には、口には言えないくやしさでした。みんなのこんな苦労のかいもなく、負けたことは、天皇様には申し訳分けありません。ここらからお詫びいたします。

終戦記念日を前に

駒井　タツ子（支那事変応召時二十歳）

終戦後三十二回目の終戦記念日をま近にして、戦争の体験を書くようにと孫から聞き、今や日本の人口も若い世代が増えてきた時に、老人のくり言と思いながら、たどたどしく思い出を綴ってみました。

女学校の裁縫へ、毎日千人針の依頼が何本も届けられ（当時満州事変の最中）それを一針一針祈りをこめて縫うのが優先で、その後で教材に手をつける時代から始まった青春時代であっただけに、胸のいたむ思い出ばかりでございました。

当時、若干二十四歳の歩兵少尉であった主人と、学校を卒業した年（数え年十八歳）結婚して、直後言われた言葉は、次のような意味のことでした。

「風雲急で、国際関係は一触即発の時期だから、何時、召集令状が来るかもしれない。その覚悟をするように。お前の母は三十二歳で未亡人になり、四人の子供を女手一つで育ててきた。その後姿を見て育ってきたから、何とか事があっても耐えていかれると思う。」まるで初めから戦争未亡人を作るために結婚したような言い方に、反抗する術も知らぬ、元よりそんな立派な覚悟のできる年齢でもなく、学校を巣立ったばかりの新妻は、ただ悲しくなって、黙って涙ぐむほかはなかったと覚えています。

記憶をよび返すため、二階の書庫にある主人の書き残した書類に目を通してみると、藤岡部隊駒井隊戦死者名簿や大東亜戦争の時の戦記、ビルマ方面のエナンジョンからの転進作戦等々、内地に残っていた者の想像もできない悲惨なようすに、今さらながら戦死者の方や、御遺族の方に、心から黙祷を捧げるほかございません。

世界の大国を相手に、小国の日本が戦ったということは、無謀極まることだったと思いますが、当時は、そんな批判も許されないことでした。ただ勝つまでは、どんな苦しいことも耐えなければならなかったと思います。

物量に限りのある日本で、耐久生活だけでは勝てず、遂に悲しい敗戦国となり、ポツダム条約をのんだが、戦争をしたのは誰だ、為政者が悪い、軍部が悪いと人を非難する前に、これだけで助かったこと、戦後の復興の目ざましかったことを感謝し、いざという時は、こんなに底力を発揮できる国民であった事を認識して、いまだブスブスと硝煙の立ちこめる中、家を失い、家族を探して逃げ歩く国民もいる事を思い、喜びたいと思います。「ソビエト人でも、中国人でも、アメリカ人でもない。私たちは、ずっと先祖から日本人である。」ということに誇りをもって「この日本の美しい国土を、永遠に子孫に伝えていくのは、私達だ。」と、胸をはって言える人でありたいと思っています。

戦時中の生活

森口　きくの（当時二十七歳）

私は当時二十七歳で、五歳と三歳と一歳の三人の小さな子供をかかえていました。今ではその子供は、みんな子供の父親や母親になっておりますが、戦争のことは少しも知りません。

私たちは、毎日毎日何もわからぬ子供をかかえ、どうすればよいやらの生活でした。B二十九という飛行機がやってくるというので、ほんとうにおそろしいやら、どこへ逃げようか、山の中でも防空壕を作って、何どきでも入れるようにしようか、と何度思ったか知りません。

夜になると、真っ暗にして少しでも光が外へもれていると「外から明りが見える。」部落の人がまわっておいでるし、夜、ねる時は必ず枕許に大事な物を用意して、何時でも逃げられるようにしておきました。そして、どんなにして、どこへ逃げようかと、乳飲み児とヨチヨチとやっと歩く子、それに五歳の子。わかってわからぬ年ごろの子供をかかえて、ほんとうに辛かった毎日でした。そんな時の母親の思いといったら、口では言い表せないほどです。考えてみると、思いだすのもいやです。

食べ物は毎日おかゆで、まだその中へ大根を刻み入れ、なの葉をきざみこんで食べたりして、しのぎました。

工場はみんな休み、家にある鉄や金属類はみんな出し、かやのつり手まで出しました。仏様の中にある金具も、全部出さねばならないようになり、この先、どうなるのかと思いました。千人針をぬう人は、毎日お願いにおいでるし、赤紙はうちへは来なかってよかったものの、そのかわり、しば草は刈って干して出さねばならぬし、いもはたくさん作って出さなければならぬし、悲しいやらおそろしいやら、たいへん苦労して過ぎました。おばあちゃん、おじいちゃんに小さな子供を見ていただき、軍需工場へ出て働きました。家は百姓なので、田んぼや畑も作らなければならないし、どうしてきたか、今はだんだん忘れられてきましたが思い出しますと苦しいことばかりでした。

一番おそろしい夜は、何日だったかはっきりしませんが、山の上の空が、真っ赤になって見えた時でした。富山に爆弾が落ちた時でした。私たちは何時死ななければならないのかと思いました。仕事しなければならないけど、仕事も手につきませんでした。今日の日はどんな事がおきるかと不安でたまりませんでした。B二十九の飛行機が音をたててやってくるのをゾーとしてきて今夜もねむれない。小さな明りの下でわからない子供をかかえて、心の休む暇もない日々でした。私たちはまだおとうさんが兵隊に取られなかったので良かったのですが、どんな中からも戦争にいかれた方は、国のためといい、仕方なくめでたくおくりだしてあげなければならなかった。しかし、その家の人たちの事を思うとほんとうにお気の毒でならない。心の中では、どれほど泣かれたお方が多かったことでしょう。

今の人たちにすれば、ほんとうにそんな時があったのかと思っている人がたくさんおいでるでしょう。

私たちの苦しみは、こんな程度ですが、もっともっとひどく、苦しい日々をおくり下された方々が、どれほど多くおられた事だろうとお察しいたします。

疎開

沢井　なつ（当時三十四歳）

昭和十九年、秋も終わり、木の葉は散り、毎日みぞれ降る初冬の頃、小学校三年生位の子供が五、六十人、きれいな女の先生一人が付き添って、小田中のお寺に疎開してきました。先生はたしか近藤先生とか言ったように思います。たまに晴れた日があると、田んぼ道に散歩にいかれるのを見たことがあります。

親と離れ、学校や家と離れ、こんな淋しい田舎でどんな気持ちで暮らしていたことでしょう。夜になると、どこもかしこも真っ暗で、毎晩のようにB二十九がうなってくるし、食べ物はおなか一ぱい食べられないし、親を思い、故郷を思って、きっと枕をぬらしていたことと思います。それからだんだん冬も深まり、雪はつもり、戦争も深まり、淋しく悲しく苦しい日々が続いていました。やがて正月が過ぎ、たまには日の光がさす頃になっても、戦争は益々深まっていくばかりでした。

二十年三月九日、東京の大空襲で子供たちの町は焼け野原となってしまったと聞きました。どれだけ、どんなことを聞いても帰ることもできず、泣きながら毎日を過ごしていたことと思います。私たちの近所でも、左隣には乳飲み子をかかえた若い女の人、右隣りには子供を五人もつれた女の人、向かいの家には、二人の息子さんを戦地に送っている女子供と年寄りは、親せきや知人をたよって疎開してこられたのです。ただでさえ食べ物はなく、衣食不足なのに、いくら親しくても、お互いにどんなにか苦しかったことと思います。くわなど持ったことのない都会の人でも、モンペをはいて、遠い一里のある山道を歩いて、原山でさつまいもを作り、狭い道端でもうち返して、一口でも、一粒でも食糧増産に無我夢中でした。だんだん食糧がなくなるし、男という男の人は、全部戦地に取られ、大事な都会は焼きつくされ、銃後を守る国民も疲れ果てた時、八月十五日、終戦となりました。疎開していた人々は、急いでなつかしの故郷へ帰っていきました。帰ってみれば、親はなく、家はなく、どんなに泣いたことでしょう。

配給物など分ける時、班長さんの家に集まってくじをつまんだり、話し合いをしたり、共同作業をしたりしたことが思いだされます。一緒に原山通いをしたこともあります。あの人たちは、みんな今頃、いずこにどうして居られることでしょう。お寺に疎開しておられた近藤先生も、今では五十歳になっておられるはず。あの可愛らしい子供たちもみんな四十歳位になっておられるはずですが、今頃はいずこかの空の下で、家庭を持ち、自分の子供たちに、実際に苦しんだ疎開の味わいを物語っておられることと思います。また、家にも同年の子供がいて、毎日一緒に遊んだことを時折、思い出しては、話します。また、たとい一、二年の間とはいえ隣り組で一緒に暮らした人の顔が、今でもなつかしく、次々と頭に浮かんできます。

これからの日本には、こんな苦しみがおきないよう、ただただ世界の平和を願うばかりです。

軍需工場に働いて

長谷　守郎（当時十七歳）

この文は体験記録というよりも、記憶も明瞭でなく、思いだしたまま書き綴った雑文のようなものであることをお断り申します。

あの頃は戦争も末期となった昭和十九年八月、私たちは中学校をでて軍需工場へ出勤となりました。大聖寺駅裏の大同チェーンという工場で、新家熊吉と呼ばれる社長の会社でした。私たちの他の中学校や実業校、あるいは女学校も来ていたようでした。私たちはターレットとよばれる工作機械を使って、二十ミリ機関砲の弾頭部の部品を作っていました。工場関係者は、一般従業員一人当たり生産数より、学徒の生産数が優秀であると毎日賞め、更に生産に励むように申していました。

私たちは山代とか山中とかの温泉地に宿舎をとり、六時起床。電車で出勤、七時会社で朝食、八時に作業開始、午後五時作業を終わり、夕食をとり、再び電車で宿舎に帰るのでした。私たちの宿舎は、山代の吉田屋という旅館でした。その中で、特に思い出されるものは、やはり、食糧事情の悪い頃とて、一杯の盛りきり飯に、おかずは一品でした。何千人もいる人の食事ですから野菜など貨車で買うということで、一旦それに虫がついたら、お汁の野菜のかげから、ポッカリポッカリと黒い細長い虫が浮かんできて、それを箸でつまんでは捨て、つまんでは捨て、そしてそおっーとそれをすするという有様でした。魚でも時には塩漬けの生のままで食う始末で、何事も戦地の事と思って、我慢だ、辛抱だと今の時代の物の豊富さや平和な事と思い会わせて、或いは懐かしい感もすることはいなめません。

それと共に或る夜、空襲警報が発令され、皆、消灯していましたが、私たちの誰かの部屋の光が洩れていたそうです。その後、幾月か経ったある晩、工場から帰って汗を流しに風呂へ入ると、一人の見知らぬ客がいて、生徒の誰かが、風呂に飛びこんで、その客を怒らせました。あとから私も風呂へ入りに行ったのですが、風呂の中の様子が変なので入りませんでした。その客というのは、戦時中、鬼よりも恐い特高だったとか、先生始め生徒一同、空襲時の電燈洩れの一件と合わせて、さんざん搾られました。

このように、軍需工場での私たちは、勉学の場が次第にせばめられ、進学の道も学徒出陣で国を挙げて戦争遂行へ進んでいた時代でした。徴兵年齢も引き下げられて、十八歳から十七歳にも及ぼうとしていた頃、本土決戦、米英撃滅も、ドイツの降伏で次第に挫折へと傾いていったのです。

私は中学校の終わりの期間をこのような場所で、このような生活で、時を過ごしていたのです。

■学校生活

御祖尋常高等小学校
辻森　伸雄（昭和八年九月一日生）

戦争は入学してからです。今、それを思いますと、まことに苦しい時期でありました。何しろ食べるものもなし、衣服もありません。冬は学校の中でも素足です。それでも、今思うと、どうしてすごして来たものでしょうか。

また、私たちは毎日のように原山へ開拓に出かけました。大きなサツマイモをたくさん取りましたよ。今の運動場も畑になりました。二年上の上級生からは、毎日朝から、勤労学生として石勘の軍事工場へ行きました。

B二十九が頭上を通り富山県へと行きましたが、サイレンが鳴る頃は、頭の上をすぎていきました。

夏休みになれば、干草刈りです。一人何貫めと割当てがありました。戦争中戦後共に食糧と衣服のないのが一番の問題であり、また、配給制でもありました。

作った米、サツマイモ、ジャガイモは、供出しなくてはなりません。自分の家で作っていても供出、供出でありました。

学校から帰りますと、春先は田んぼ、それから刈取りまでの間は、山へタキ木取りです。親も子も、家中の働かれる人は、皆一生けん命に働きました。

ふりかえってみますと、私たちにすれば、二度とない貴重な人生の一ページでもあったと思います。

思うに、共に国民のため、国家のために尽されました人たちに心からお礼を申し上げたい心で一ぱいです。

学校のようす

池島　祐夫（当時十一歳）

今、思えば、学校の授業は一ヵ月にして十日間、二十日間は食糧増産にはげみ、また、兵隊に行ったために働く男の人のおられた家に手伝いに出かけたり、あぜ草かりや、稲運びなどをしました。それから海に近い学校では、塩作り、米軍が海からせめて来るかと夜昼見はりにでるのに竹やりを作って持っていきました。

山へは食べ物用にどんぐりを取って来て粉にし、カンパンにして食べたり、田へいなご取りに行き、あさ（ちょま）は服の生地にするのにとりにいきました。冬の間学校に使う炭は、山へ行き、くぬぎ、くりの木、ほうそうの木などを切り、一週間以上かかって炭を作り、それをみんなでかついで学校に帰りました。

少しでもあいている道端は、砂利だらけの所ども大豆を植えたりしました。

石勘工場で

作者記載なし（当時十四歳）

私は、終戦当時、小学校の高等科の生徒でした。

石勘工場は軍需工場に変わり、飛行機の部品を作っていました。毎日工場へ出かけ、びょう打ちをしました。おとなの人に指導、かんとくされて、失敗するときびしくしかられ、それこそ真剣にびょう打ちをしたものでした。

今、当時のようすを話しても、実感として理解されるものではないと思います。

しごと・べんとう

岡島　信子（当時九歳）

夏休み中に、干草を作って持っていきました。秋は、いなご取り、どんぐりひろい、落ち穂ひろいをした記憶があります。運動場にさつまいもを植えました。

べんとうを食べる時、校長先生がまわってこられました。しろいごはんを持ってきている人がいるか、もってきているとしかられます。

四年生の八月十五日が終戦でした。

題名なし

山敷　トミ子（当時九歳）

戦争は遠い昔のことですが、私は九歳のころ戦争にあって、汽車に乗ってもまどから乗ったり降りたりしました。汽車に乗った人は、ほとんどが買い出しの人で満員です。私はそんな汽車に二回ぐらい乗ったことがあります。お母さんは満員の汽車によく乗りました。

学校では米を作ったり、B二十九が来るのでやりのけいこをしました。

昔は食べ物がなくて、学校でお昼の給食がなかったので、弁当をもっていきました。米のごはんでなく、おなかのふくれる●●●でした。

校舎今昔

堀納　隆史

ふりかえってみますと、時代の流れ、文化の進歩は今日と比べものにならないくらい充実せざる時代でした。しかし、向上心に燃え、我等母校の名誉にかけてと、皆努力した時代でした。

今日の教育を見るにつけ、先生方の指導、更に非常に進歩せる設備の中で教育を受ける子供は幸福です。朝に碁石ヶ峰を眺め、夕に邑知の落日、標高海抜百メートルの高台に建つ御祖小学校。よき先生方と、手をつなぎあって勉学に進んでくれますように、父兄として、心から祈っております。

校舎の設備は、他校に比較して不備な点もあるかもしれませんが、昔を思えば夢の様な校舎です。

かつて我々が通学した校舎は、前は音楽堂と講堂、化学室なし。運動場も一周百メートル、直線五十メートル、プールなし。ただそれだけでも、テニスコートだけは立派なのがありました。かかる設備なき学校でしたが、運動と学力だけは鹿島郡内の他校には、一歩もひけはとりませんでした。

当時を懐古しつつ、校舎の今昔の一端をのべてきましたが、我々父兄は、先生方とずっと手をとりあって、あらゆる努力を続けていきたく思っています。

きびしかった戦争中の学校生活

亀井　登（当時九歳〜十歳）

第二次世界大戦が始まった当時、私は小学校一年生で、たいした記憶もありませんが、三年生から四年生（終戦近く）の学校生活が、どんなものであったかは、多小記憶しているので述べてみたいとおもいます。

昭和十九年、私が小学校三年生の時の頃は、戦争もだんだん激しくなり、日毎に国民の生活状態が悪くなってきました。物資の不足は、いかんともしがたく、供出という形で各家庭の貴金属というものは、ことごとく持っていかれました。橋のらんかん（鉄製）のようなものまで、戦争の道具となったのです。燃料の不足もきびしく、まつの根堀りもよく行なわれました。松の根からは、油を取ったのです。食料不足はいうまでもなく、開墾出来る山野は、殆ど甘藷作りの畑として耕されました。学校の運動場も半分近くが、甘藷畑にかわりました。品質も現在のような甘藷でなく、人間の頭ぐらいの大きさになる増産型で、その名もいかめしい「護国」という名のついたものでした。学用品といえば、私達の靴の中は、新聞紙を閉じたようなうすい教科書、わらばんし（更紙）を閉じたノート、ちびた鉛筆ぐらいのものでした。授業時間の大半は農作業でした。いろいろな野菜を作ってそれを売って学校の備品を買ったものです。それから、学校は必要な資料の運搬は、すべて、生徒の手で行われました。三年生の冬のことでした。三年以上の生徒が原山へ薪運びにいったあの日のつらかったことは、今も私の心にあざやかにのこっています。粉雪のまいちる寒い中を破れた長靴にわら縄をまき、ぬれて重たくなった薪を背負って、すべる足元を気にしながら、よたよたとおりてきたことを。肩に喰いこんだ荒縄の痛かったことといったらありませんでした。高等科の姉さん達が数本薪を私の背から抜いてくれた時の嬉しかったことも、今も忘れ得ぬ思い出です。授業をしている最中によく警戒警報のサイレンが鳴りました。サイレンが鳴るたびに、全員近くの山の中へ避難しました。そして、敵機が、飛行機雲を引きながら遠ざかるのを草かげにじっと待っていたものです。

当時、遠足や旅行はありませんでした。唯一回、海水浴につれていってもらったことを覚えています。一の宮小学校まで、それも全部乗物なしです。てくてくと歩いていったのです。道中敵機襲来の報があり、近くの物陰や山の中にかくれ、数時間を費やして辿りつきました。

昭和二十年になると、戦争は一だんとはげしくなり、本土決戦が叫ばれはじめました。私達は、竹槍作りに精をださなければならなくなりました。年輩の先生方も、補充兵としてかり出されるようになりました。とうとう校長先生まで出征されることになりました。私達は、能登部の駅まで、日の丸に小旗を持って見送りに出ました。汽車の窓から、身をのり出して別れを惜しまれた校長先生の悲壮な顔が、今でも瞼にうかんできます。その頃は、都会の子供達が田舎の方へ疎開してくることがはやりました。都会の爆撃がそれほどひどくなってきたからです。暖かい両親の元を遠くはなれ、見ず知らずの土地にきた子供達はどんなさびしい思いをして、この地にきたことでしょう。私達は、そんな子供達へ、わずかな自分のおやつ（当時のおやつ

は、大豆の炒ったのにしょうゆをかけたものとか、いも飴でした。）を分けてあげたものです。夏休みに入った頃、富山が爆撃にあい、丸やけとなりました。この御祖地区からも、真赤にやけている様子がよくみえました。それからも毎晩燈火管制がかれ、屋外に灯がもれないよう電燈に黒い布をあてて、爆撃をさける努力をしました。食料事情は益々深刻となり、人々は、山菜や草の根を雑炊に入れて食べるようになりました。みな、目ばかり大きく、骨ばった体をひきずるようにして、やっと生きていました。今日も明日もと、ひもじい、ひもじい思いで戦争をたえしのんでいた矢先、とうとう八月十五日、終戦の日を迎えました。その日学校の朝礼で日本が無条件降伏をした事を先生から知らされました。四年生ぐらいの私達には、そういわれても何のことやらピンときませんでした。ラジオで天皇陛下の玉音を聞いても、日本が戦争に負けるなんてことは誰も信じていませんでしたし、またそんな教育を私達は受けていなかったのです。先生方は、みんな泣き出された事を子供心にも、覚えています。暫くして進駐軍から、学校にある銃機類、なぎなた、木刀、竹槍等を燃やしたり、土に埋めて処分するよう通達を受けました。その後、進駐軍が検査にやってきました。当時私達は、体操の授業をうけていた時でした。全員講堂でかけ足で走っていたのですが、先生がアメリカ兵を見るや否や、後向きに走るよう指示されました。私の学校生活で、後にも先にも後向きに走ったのはこの一回だけです。アメリカ兵は、私達のこのへんな競争？を見て、何か歯を出して笑って見ていました。

戦後のインフレはものすごく、物価はすごい勢いで上昇したように思います。拾円札に、印紙を貼ったものを使ったこともありました。戦争の犠牲になった人達の遺骨がもどってき始めました。復員された人達も、ボツボツ見え始めました。しかし、復員される人達よりも遺骨となって帰られる人達の方が、遥かに多かったように思います。血を分けた親、子、兄弟を戦争で失った人達の心は、どんなだったでしょう。二度と戦争は、起こしてもらいたくない。みんなこんな気持ちだった事だと思います。

国民学校時代の思い出

辻屋　喜代栄（当時八歳）

第二次世界大戦が勃発した昭和十六年十二月八日、当時私は羽咋国民学校三年生でした。まだ子供だった私は、戦争とは遠い国のできごとのように思っていましたが、戦争がはげしくなるにつれ、だんだんただごとではないんだということがわかりかけてきました。

学校生活は、学習よりも、日の丸の小旗を手に、「天に代わりて不義を討つ、忠勇無双の我が兵は・・・」とうたいながらの出征兵士の見送りや、戦死された方々の遺骨の出迎えに駅へ行くのが仕事でした。運動場は、麦やいも畑となりました。夏休みの宿題は、畑の堆肥用の草刈、軍馬ようの草刈りで、よく天日にほして、一人何貫目というわりあてを守るためにがんばりました。あらゆる物資が不足し、食糧事情もきびしくなりました。「欲しがりません、勝つまでは。」を合言葉に、わずかばかり配給された米に、さつまいもやなっぱのいっぱいはいったおかゆを食べて、我慢しました。また、何で作ったのかわからない真黒いパンを食べました。

私が六年生だった頃、昭和十九年九月十七日大阪淀川国民学校の五、六年生が集団疎開をしました。その夜大きな風が吹きました。両親と別れて見知らぬ土地へきたその夜にあんな大きな風が吹きまくったのですから、大阪の児らは、さぞ悲しかったことでしょう。羽咋町内のお寺に分かれて泊り、私達の学校へ毎日通っておられました。終戦になってから十月に大阪へ帰られましたが、あの方達は、今どうしていられることでしょうか。

終戦二か月ほど前だったと思いますが、富山が空しゅうをうけ、夜中に起こされました。まっ赤な空を見て、いつかは、私達のところもあのようになるではないかと思い体が、がたがたふるえてとまらなかったことを覚えています。八月十五日、近所の同級生万里ちゃんと二人で、軍馬の草かりにでかけました。昼おそく帰ってきて、戦争が終わったことをしりました。何が何だか分からず変な気持ちでいました。

あれから、早くも三十二年。経済の成長はめざましく、金さえだせば何でも手に入る便利な世の中となりました。けれど、私達は戦争中に仕込まれた「欲しがりません。〇〇までは。」の心は、いつまでも持ち続けていきたいものだと思っています。

戦争中の学校生活

井藤　幸子（当時六歳〜十一歳）

昭和十六年四月、小学校が国民学校と改められた年の一年生に私は入学しました。当時日支事変の最中で戦争の話題は出ていましたが、それほどひどく感じませんでした。しかし、その年の十二月八日、日本は米英を相手に大戦を始め、幼な心にも、戦争のひどさを意識するようになってきました。

最初は、戦争状況は勝利の一方で、一、二年生はなに不自由なく過ごしてきましたが、四年生の春頃から、だんだん日本は負け戦さとなってきました。やがて日本本土にも空襲が始まり、都会方面からたくさん人々が疎開してきました。サイパン島や沖縄が玉砕した頃、石川県にも警戒警報や空襲警報が出るようになりました。外国からの輸入は一切止まり、あらゆる物資が不足し、すべての物が配給制となりました。学校も授業はあまりせず、毎日のように勤労奉仕をしました。高等科の生徒は、軍需工場へ四、五、六年生はあき地、野山、道端、運動場の開墾作業をしました。運動場半分位が畑となり、さつまいもが植えられました。私達の手で植えたり、おこされたりしたさつまいもは、東京や大阪方面へ主食がわりに送られていきました。私達は、毎日毎日のさつまいもには、すっかりあきて「白いご飯食べたいなあ、バナナが食べたいなあ、お菓子が食べたいな。」と何度心に思ったことでしょう。そう思いながら、「お国のためだ、がまんしなくちゃ。」と歯をくいしばってがんばりました。その頃は、近所をみまわしてみると、男らしい男はいませんでした。うちのおとうさん、となりの兄さん、しんせきのおじさんと、兵隊や軍ぞくにいかれて、老人と子どもたちがのこっている状態でした。農繁期になると人手不足の関係から、授業は一限だけでおわりました。稲刈りがすむと、一年生から山へどんぐり拾いにいきました。飛行機の油をとるためです。割りあてにたりなかった人は、授業を休みにしてとりにいかされました。少ししかしなかった学校生活も、それほどきびしいものでした。万事軍隊式で、「きをつけっ」の姿勢がわるかったり、少しでも動いたりすると、かんかん照りの運動場に長い間立たされました。毎日勤労作業、集団訓練等のくりかえしの中で、空襲警報がなり、福田の宮の森へ逃げました。逃げる時は、防空ずきんをかぶり、救急袋をもって走りました。

そんな生活のくりかえしの中に、とうとう八月十五日となり、終戦になりました。

■空襲

空襲

辻屋　又五郎（当時二十歳）

私は昭和二十年三月七日現役工兵として、大阪港区暁部隊に入隊しました。本土決戦と言われ、敗戦の色も濃く、各所が空襲されている頃でした。

小学校を兵舎にして入隊して一週間目、午後八時頃空襲警報のサイレンと同時に、港区周辺にB二十九の大空襲がはじまった。わが部隊の宿舎も焼夷弾の投下を受け、付近の民家も、火の海と化した。

「それ！空襲だ。退避せよ。」

指揮官誘導で、校舎を出ようとする時、すでにまわりは火と煙で息つく間もないくらいです。焼け落ちかけた階段を駆け降り、運動場に集合した。

班ごとに、近くの港へ避難する途中、道の両側の家は焼けおち、電柱も途中より燃えて折れ、道路はトンネル位のところは空間なので、その間をようやくにして逃げ、港の広場に着きました。

ふりかえって見れば、火、火、火、火、・・・。遠くで高射砲の炸裂する音が、線香花火のように聞こえてきます。しかし、それは何の効もなく敵の奔放にまかせるばかりです。ごう音を立てて、二次三次と息つく間もないB二十九の爆撃・・・。やがて、目的をはたした敵機は遠くへ去り、空襲警報解除となりました。

そのあとは、目もあてられない惨状です。あちらこちらで真黒な死体がゴロゴロ・・・。この世からの生き地獄をはじめて体験し、戦争による犠牲の痛ましさをひしひしと身に感じました。

宿舎を焼失した部隊は、湊屋小学へ移動し、そこで基礎訓練を受け三ヵ月後の七月に敦賀港へ移動しました。敦賀では、専科の工兵よりも船乗りの訓練で、飛行機のエンジンをつけた小型ボートに爆弾を積んだ敵船に体当りするばかり・・・。訓練中、幾度か敵の艦載機グラマン戦闘機で機銃照射をうけ、危うく命をおとすような事が幾度もありました。

近くの東舞鶴舞鶴港で、満州より来た爆薬の弾薬の荷上げの作業中に、もしも敵機に爆撃されたならば、一瞬の内に舞鶴は跡かたもなくなるほど大量の爆弾で、少しでもショックをあたえたならば、爆発する重大さに、我々も慎重に慎重に扱い、荷上げが完了した時は、ホッとしました。

港内に軍事物資を積んで出入中の輸出船が、米軍の投下した機雷にふれ一大音響と共に水爆があがり消えた時は、もう船はなく海面に白い泥だけが残るというような事を数度目撃しました。

七月十三日、朝からしとしとと小雨が降る不吉な予感のする不安な日でした。うつらうつらする消燈二時間後の十一時頃でした。空襲のサイレンが鳴り、すわとはね起き武装する間もな

く、B二十九の夜間空襲です。敦賀を目ざして焼夷弾の投下する作戦を取り、三十七本束の焼夷弾は、空中で分解し、バラバラと落ちると、たちまち火の海。防空演習の火たたきやバケツリレー訓練を受けた隣組も、なすすべもなく我が身の逃げるのに精一杯・・・。

我が軍隊は、避難場所を誘導する命令で声を枯らして指示するが、混乱する人々の耳には入らない。混乱に混乱を重ねて多くの犠牲を出し、我が部隊員も黄燐傷痍弾のゴムのごとくねばり付く黄黒のしまもようの火傷を負いたる者も数人ありました。中でも、班長殿は、すぐそばで焼夷弾の一本直撃を頭に受け、目の前で戦死された。雨の中を背負い、隊へかえりなき霊をとむらいました。

悪夢のような一夜が明ければ、見渡すかぎり焼け野原、余燼のくすぶる中で死体を始末し道路を整理する事、数十日、これで空襲はないだろうと思っていました。ところが、七日二十日、今日は珍しい快晴。事なきを念じていた矢先でした。昼食中、空襲警報が発令され、西の方よりB二十九の編隊が郊外に残っていた紡績工場へ、一トン爆弾を投下したのです。巨大なコンクリートの建物は破壊され、めらめらとあがる火煙で大空も暗くするほどのものすごさ・・・。

我が軍隊は、ただちに現地に行ってみると、予想以上の被害で目をおおうばかりです。昼食中で爆撃をうけた者は多く、女子工員の犠牲になった者は、無残にもがれきの山、血の海の中に、手足はちぎれ、首はとび、中には一切れの肉だけ残ったもの、手のつけようがないありさまです。急ぎ、かけつけた家族は、肉親の無事を願い、名を呼び探すのを見て、一層涙をさそい言葉では言いあらわされない悲壮な実感でした。

戦争の悲劇を目のあたりで幾度か見て、人類に再びこのような悲劇をくりかえさぬよう心に祈りました。

こうして数日がすぎ、長い長い戦争は、八月十五日終戦となり、九月十日、なつかしい我が里へ復員をしました。

空襲を受けて

今井喜一郎（当時十九歳）

在学中に召集令状が来て、八月一日富山に入隊しました。その頃は空襲もはげしくなり、その晩空襲に備えて、避難方法と場所について、現地説明が行われていた。その時です。空襲警報のサイレンが鳴りわたり、あたりは急に暗くなっていった。しばらくして爆音が近づき、頭上を通り過ぎるかと思われた瞬間、異様なほどまぶしい照明弾が一発おちて来た。現地説明が本当になってしまった。

それからというものは、三機編隊のB二十九が波状攻撃をかけてきた。一発の焼夷弾は、神通川の鉄橋入り口におとされ「ズシン」と重苦しいくらいひびいてきた。そのあと、焼夷弾の計画的なおとし方に驚いた。

富山駅をはじめとして、市内を環状に焼き、最後に共舎を集中攻撃した。ドラム缶が爆発し吹き上げる火柱は、凄絶を極めた。その頃は、市内は火の海となり、避難している我々の頭上にも焼夷弾がおちはじめた。空中に閃光を放ち、その位置から焼夷弾は散らばりはじめる。危険が迫ってきたのである。今日入隊したばかりの新兵には、命令も規則も通用しなかった。散々伍々というより蜂の巣をたたいたように逃げはじめた。私も同僚と声をかけ合って、いつの間にか四キロほど離れた呉羽まで逃げていた。ローソクを並べて燃やしたような家並みの中を、タオルをぬらして頭からかむり必死に逃げたものだった。

呉羽から見ると、富山の空は赤く、そしてぶきみな音が聞こえてくる。夜露にぬれた草の上に体を横たえながら、戦争の悲惨さをじかに感じた。

夜明けを待って富山に帰った。田んぼには焼夷弾が二メートルに一つのわりにおとされていた。市内は、あとかたもなく燃えつくし、余じんがくすぶっており、県庁の窓は吹き出した煙のあとで黒くすすけていた。

兵舎に残っていた者は、消火作業で殆ど火傷をし、顔面一面を白い包帯でつつんでいたのは、大変いたましかった。

一夜明けて、我々の着る服も、はく靴もすべて灰になってしまった。地下足袋の金のホックが山のように残っている。コンクリートの防火壁だけが立っている。唖然とした気持ちで眺めているだけだった。そのうちに、みんながどこからともなく集まって来た。

それから一週間、焼けあとの整理が続き、一日がおわると神通川に入り水泳である。そして、不発の焼夷弾が散らばっているのを集めて持ち帰るのである。

八月十日頃から、石動に移動し、小学校の校舎が兵舎にかわった。子供達はどこへ行ったのか、どこで勉強しているのか？学び舎を軍隊が取り上げてしまったのである。

広島に長崎に原爆がおとされ、毎日の演習にも精が出ず、勝てる戦争でないことが当時の将校連中には、わかっていたらしく、そのふるまいから我々にも察せられた。

焼けて、靴もなく、地下足袋もない、「ワラジ」ばきの兵隊が誕生したのもその頃であった。当時は、「ワラジ」を作るのを指導しろとのことで、代表を集めて講習をしたが、そんなに上手に作れるものではない。しかし、自分で作らないとはくものが

ないので、昼休みは、「ワラジ」作りに精をだしたものだった。その姿は、滑稽でもあり、悲壮さを感じさせられたものでものであった。

八月十五日、今日も演習に出かけていく。道端の小さい子供達が口々に、

「負けたがに演習にいくがかいや。」

といっていた。本当とも、うそとも思われたものだ。

二、三日たって、はじめて終戦を知った。よかった。とみんな喜んだ。本当の兵隊になっていなかったのである。

正直いってよかったのである。戦争のみじめさ、人間同士の争いはなんとしてもさけなければならない。

二週間の軍隊生活では、お話にならぬが思いのままにかきました。

戦争の思い出

毛利　照子

戦後三十数年も過ぎ去り、あらためて戦争中の色々の思い出を振り返ってみますと、本当に遠い昔の悪夢を見るような気もちです。

いま、子供達に当時の話をしましても、小説の話を聞いているようで、とても現実にあった事とは思われないでしょう。

いろいろの事が、走馬灯のように次から次と思い出されますが、私にとって最も印象強く心に焼きついておりますのは、終戦直線に富山が大空襲を受けた時です。金沢上空をあかりをつけた敵機が飛行し、私は母と一緒に小さい弟や妹を連れ、防空頭巾をつけて有松の林子畠の所へ避難しました。

多数の人達が、布団を持ったり、毛布を頭からかぶったりして右往左往していました。はるか富山方面の上空は、真赤に燃え上り、本当に恐ろしい状況がよみがえってまいります。もしも、富山でなく金沢が空襲を受けていたらと思うと・・・。いまだに、身の毛がよだつといいましょうか、恐ろしさがひしひしと感じるしだいです。

そして、無事に生き残った私達は、精一杯に生きなければといった気持ちが、沸き上って参ります。

戦地での生活

三宅　久雄（当時二十一歳）

ハワイ真珠湾攻撃ではじまった戦争の昭和十六年十二月八日、金沢の学校に在学中であった。アメリカなどの国を相手にこれは大変なことになった、と思った。

戦争は、だんだんとひろがっていった。そのつぎの年に卒業したが、すぐに軍隊に入ることとなった。

すぐに戦地にいくだろうからと、母は半年前から千人針を七尾と羽咋の女学校へ頼みに行った。白い木綿に朱肉を押して赤糸を結んで、はさみを使わずに手で糸を切るので力が要るし、仕上げまでに幾月もかかった。父も日露戦争に行ってきたので、救急法を教えてくれた。いよいよ入隊の日になって親戚や近所の人との送別会があって、つぎの日に駅まで、たくさんの人の見送りを受けた。

京都まで行って一週間程で中国に行くことになった。中国では五、六年前から戦争が続けられていた。家族の者から、最後の見送りを受けた。軍隊では腹がすいているのだろうと、パンや牛乳を店で買いたいのだが、配給で早い中になくなるので、家からさつまいものゆでたのを持ってこられた。

汽車で九州の博多まで行って船に乗った。輸送船は真っ暗な船倉で二週間見動きもできなかった。暑いのと汗とでむせるので風がシャツにいたるところについて、体全体がブツブツに赤くはれた。

揚子江から上流の山奥の安慶に上陸した。すぐに近くに鉄砲の音がしきりに聞こえた、次の日には痛々しい怪我をした人や、なくなった人を兵営前にならんで迎えた。

朝は五時に起きて体操や射撃訓練をした。食事前には水汲みや掃除で腰をおろして休む暇もなかった。心と体を鍛えるのにきびしく毎日は泥と汗にまみれた。タバコをのむ五分がたった一刻の自由の時間であった。

はじめいた駐屯地からその後いくつかかわったが、マラリアと伝染病の流行で野戦病院に運ばれる人が多くなり、衛生に注意したが、きれいな水がなくて、病気もひろがった。日本の山の緑、清い流れの川を思い出してなつかしかった。

戦争は次第に日本がおされて、この頃から三年後には日本の本土決戦が言われるようになり、東京、大阪が爆撃されて大都市が燃えていった。

南方ビルマへ転戦することになったが、先の船団が沖縄、台湾近海で沈められ、戦況がすっかり悪くなり、敵飛行機の機銃掃射がたびたびあって食糧をはじめ、すべての物資が途絶え始め、孤立状態におち入って、一層にきびしい生命に危機を感じはじめたのは、終戦の年の春であった。

戦争体験

合田　保志雄（当時二十一歳）

金沢部隊は昭和十二年九月九日、動員下令に伴いまごころのこもった千人針をもらって、国防婦人会員の旗波で金沢駅までつづく、わすれようとしても忘れられないあのうれしさ、大阪港より船で上海に上陸するや女学生約五百名の姿も現われて旗波作戦にとまどわされて上陸地、はや戦場の出発でもあった。第二次補充兵編成をも呼んでいる、きびしい戦場の中で病院生活をした私は申し訳けないとも思う。

兄は戦地で戦死した状況を知らないかと日頃より心にかけながら生活し、外地に慰問袋を送ったはずのもが内地の病院生活者に届いた。うれしい便りに花が咲き姉と母は面会をもとめた。患者は戦友の教え子と知った。退院後は法要にも参加し、門徒寺住職の佛前、慰問袋の講和でもあった。だが戦友同志の助け合いによって、第三次編成の教育にも参加した。国をあげての戦いがつづく。私は長期復務者編成となり、沖縄作戦にも参加した。あの小さな島は、日本兵の空、海、陸にと沢山の編成をした、部隊警備の島であった。その中で石部隊と武部隊があったものです。金沢部隊はあだ名が武部隊です。武は海の上ならかるく走る。石部隊は海に落ちるとのことわざの如くです。ある朝四時頃より私達の警備地区で、飛行機六百機の空しゅうでつきまどわされたもの、夕方頃になって、やっとおさまったこともある。その後、上司の命令で沖縄より台湾に出発命令をもらった武部隊です。海の前方は敵の舟十数隻ならんでいるので、なかなかぬけられないありさまです。その時の船長さんは、石川県の高松出身者で沖縄路五十年間体験者であって、日頃なら一泊で行くところ、戦争中なので、へびの曲がりの如く、うねうねとして七泊でようやく目的地台湾に着いた。はやビー飛行機、二十機が上空で姿をあらわして警備地区をつきまとい休むいとまもなく、でも私達金沢部隊を送って下された石川県の船長さんに、大変感謝しているのが今でも目にうかぶ戦地での生活でもありました。

戦地での生活

今井　一雄（当時二十三歳位）

行軍命令、明日より六十里余、一週間の強行軍、本日は完全軍そう、準備をすること。背のうに食糧、衣類、日用品をつめ込んだ。その他、十家、へんびなど戦闘に必要な物全部を準備したところ、身につける重さ、約十貫（約四十キログラム）明日出発、本日は休養、といっても野戦各々、警備はしなくてはならぬ。起床ラッパに起こされて、さて出発。第一日目は十二里、背のう持ってみた、重くもちあげられない。それをかついで、十二里もいかなくてはならぬ。とても今では考えられない。また、途中、何時敵に会うかも知れない戦争中です。

第一日、二日目は大体元気だったが、三日目位からだんだんつかれてきた。この旅は十日も続き、こんな日程で六十里余りの行事が終了したが、その間の苦しかったこと、つらかったことは表現できない。足のうらには血豆の治療が一番の先決であるが、仕事が山ほど。第一に御飯の用意から自分の身の回り、上官の身の回りまで世話をして、また、兵器の手入れと、床に入るまで手のすくひまがない。だけど、足の手あてをしなければ、明日はぜったい歩けない。

その治療の仕方は、豆の所を針と糸で、その糸にはヨーチンがたっぷりつけられ、縫うようにレマ中とヨーチンを入れかえるのです。大きいものは、注射器で中の水をとり出し、次はヨーチンを注射すると、とても口には言いきれない足のうらに、火がついた様です。今思い出すと、身ぶるいがします。又、行軍途中、十分間の休けいは特に、待ち遠しい。「休けい」と声がかかれば、川原の石ころの上でも、水があっても、知らず、すわればぐっすり、どんなふとんの上よりも楽だった。

暗くなった行軍は、ねむりながら歩き、前が止まればそれにぶつかったまま、立ちねむる。きがつくと前の人は、ずっと向こうに歩いていた。

在満終戦前後

水口　一郎（当時二十二歳）

昭和二十年八月九日午前十時頃騒音に何事と思うや非常呼集がかかった。場所はソ連国境興安市。部隊は特別警備隊（特別機関兵の合併部隊）。私は一憲兵だった。その騒音こそ不可侵条約を無視せるソ連軍の越境攻撃だ。敵戦車の侵注それに加えて敵機の爆撃。今まで平穏な満蒙の広野は一瞬にして黒鉛と騒音の中を戸惑い狂う民衆、馬車の狂乱の地獄の様相と化した。

市中の状況偵察を命ぜられた上官と私は、右に左にあらゆる障害を避けつつ町の中を巡視した。勿論、徒歩。爆風により吹き飛ばされる者、荒れ狂う馬豚、家財道具を、馬車を頼りに必死に逃げ惑う満人、筆舌に表し難い。而し不思議に市中には日本邦人の姿は無かった。

本隊に帰るや防空監視を命ぜられ、小学校屋根へ上がるや機銃掃射を受け、私のみ残り、二人は直撃弾により戦死、戦争の恐ろしさを身をもって体験した。興安駅は邦人集合により、大混乱。汽車は発車せるが音ばかりで、足は全く遅い。しかも屋根上まで人でいっぱい。

夜明けになるや敵の機銃掃射を受け、車中は死傷者続出、夏の車中、悪臭に全く参った。白城子に我等憲兵約二十人下車、山中の日本開拓団救命に向う。其の団名、記憶は無いが、野原の日本人村落に火の手が上がった。全員、自決の覚悟と言うが、それをいさめ、満人軍馬十数台に分譲出発。我等は徒党にて護衛、次の村落又次の村落と手当り次第、日本人開拓団の疎開方を進めることを本業とした。広野の中でこの様な活躍をしながら邦人と共に歩くこと十日ばかり、その中不吉な空気がただよった。

それは八月二十日夕刻、情報は敗戦という。失望落胆、全員一斉に大地に臥して号泣した。役二時間後、全員励まし合い再出発。この時点軍服はすべて捨て、支那服に変して武器は拳銃一丁腹に隠し行動開始、次の開拓団救出に奥へ奥へと歩んだ。

八月二十三日康平屯に到着休憩す。ここにソ連戦車に蹂躙され、男のみ捕虜となり、二十四時間絶食、監禁される。勿論拳銃は押収され、邦人とは全く引き離された。二十四日夕刻、ソ連乗馬兵により護送される身となった。

何日歩いたか記憶は無いが、丁度連日の豪雨に疲労と空腹、衰弱とに倒れて、置き去りになる者続出、声も出ず只我が身の足を運ぶのに懸命であった。

八月末日、夜半、鉄嶺映画館に収容され、日本人居留民団へ私達全員引き渡され、不安の中に久方振りに日本人同胞の温かい待遇に接し、涙ながらにメリケンダゴ汁をすすった。

二、三日後、鉄嶺の日本軍へ編入されたが身の危険を感じ、同志四人で逃避、空家に藁と古毛布を寄せ共同生活が始まる。途方に暮れていた子供連れの邦人婦人二世帯（現在、富山新湊に医師、羽岡久治氏、当時小学校四年生と母辰子）協力しながら外部の中国人・ソ連軍の騒乱の中に生きねばならなかった。

只生活は出来ぬ、金銭と冬を控えた大陸の寒さが心配だ。生きんが為には、手段を選ばずとか、自然、中国人に、今思うと相済まない行動を協同で行わざるを得なかった。

僅か終戦より帰国迄九ヵ月という短期間であったが、長かっ

た。流言造言と不安の毎日である。必然的に日本人は助け合い、同県人を見つけると兄妹の様な親しみになり交際した。今尚交際を続ける邦人は五、六人いる。

其の間、中共軍と国府軍の争い、明ければソ連軍治安下になり、此の三軍の占領下に変わること幾度、その間に於ける邦人のみじめさは、筆舌にし難い。

待ちに待った帰国のうわさを聞いた。而し逃亡兵は乗船出来ぬと、・・・それでなくても、外の事もあり、住所氏名身分はすべて偽称結婚（勿論書類上）までもして申込みをした。出発一週間後には、待望の海を見た、コロ島の港である。然し男子は残され、帰国の船を毎日見送りつつ国府軍の弾薬運びに労使されること五日間、念願の乗船を許された。夢かと我が眼を疑った。誰が出したか船内に日の丸がはられるや、自然的に君が代が流れ、感涙と共に肩を抱き合って喜んだことは終生忘れ難い。勿論、博多港を見たきれいな日本の姿を・・・、しかし戦争は御免と言いたい。

私一生を通じ一番の苦を体験した。即ちソ連軍の護送を受けた時、我が資産としては金一銭無く、手拭い一本なく、只支那服上下一着のみ、フンドシ迄も無い、その上風前の灯の命、戦争は御免だ。今日一日一日の平和に感謝したい。

思い出

D・T・L通信隊　木戸

ベトナムに居ること、六年。二十年三月九日陣地を放棄し、アンナン山脈を潰走し始めた敵軍背後を衝いた山下。野地両部隊の如きは駄馬すら通信不能の峻嶮を通り、糧秣補給も全くつかずあらゆる困難を克服し、所在の敵を撃破しつつ北進したのである。

赤紙と戦地での生活

藤井善左ェ門（当時三十三歳）

不詳私は、昭和八年徴兵検査を受け（満二十歳）第一乙種となりました。当時は甲種合格が現役兵となり、又、現役志願をする者もありました。現役兵は二ヵ年間軍人生活教育を受ける。但し、各市町村には青年訓練所があり、現役兵を満期除隊された成績優秀なる方を四名指導したものです。尚、第一乙種の抽選番号の早い人は三ヵ月間、教育召集を受けることになって居りました。

徴兵検査の区分は、甲種乙種には第一、第三があり、丙種丁種と区分され、満期除隊した人は予備役。第一、第二乙種を第一補充・第二補充役、他を国民兵役と言って居りました。第二次世界大戦の末期には、国民兵役の一部の方まで赤紙がきました。

私は、昭和十三年九月一日、金沢東部四十九部隊に赤紙入隊、同日附で陸軍衛生兵となり軍隊教練を受けた後は、陸軍病院で人体構造衛生生活、救急法、衛生材料等に関する教育を終了と同時に中国山西省へ派遣され、第九師団衛生隊勤務となり、山岳戦に参加致しました。

衛生隊の勤務は、前線で負傷した将兵を野戦病院へ護送するのです。尚、区分すると、前方勤務と後方勤務とがあります。戦闘部隊、後方部隊共、軍医衛生部員が戦傷兵の看護に従事したものです。昭和十四年十二月末師団は内地帰還命令を受けました。昭和十六年七月、再度赤紙入隊、金沢東部四十九隊へ師団衛生隊要員として八月満州牡丹江液河で師団衛生隊が編成されました。

翌年十一月満州の駐屯部隊の大部分が南方に移動開始、我が衛生隊は解散し、三ヵ年未満の勤務者は所属部隊へ復帰する事になり、満州第四一四部隊（歩兵第七連隊）に転属致しました。連隊長以下四千五百名余の部隊でした。部隊では自活農園壱百町位を経営しておりました。苦しかった冬季演習一週間、氷をとかして水を作り、自炊といったものですが、天幕露営で五寸釘を大ハンマで打つ位の凍結でした。

部隊で各種予防接種や健康管理には充分留意したものですが、万一身体の悪い時は毎日軍医の診断を受ける事が出来ます。

各隊には医務室があります。病状を区分し、一番軽いのを就栄と言って薬や注射で勤務は平常通り、次は劇務休と言ってむりな勤務をさせない。次は班内で休んでいるのを練兵休と言い、更に好転しない時は入室をさせます。尚、病状が悪いときは、陸軍病院に入院し、更に悪い場合は内地還送となり、充分な療養を受けるのです。

昭和十九年七月、当部隊もいよいよ南方移動の命を受け、鹿児島の桜島に上陸一泊し、二昼夜船で沖縄上陸、同年十二月第九師団が大本営命令で台湾移動、十一日間かかって台湾に上陸しました。

台湾は食糧も充分で大変よい所でした。都会（首都台北）は相当な被害を受けて居りましたが、人間感情は日本人に勝る位でした。五十年間の日本政府の政策の御蔭で、教育はゆき届いて居り、学校の廻りには先生方の官舎がありました。終戦と同時に北京語の普及で一週間位で、中国の国家を子供も大人もみ

んなで歌って居りました。
いよいよ中国軍隊が上陸されて、戦勝祝いが各町村で三日間あり、日本の昭和御大典の御祝い以上でしたが、私達の感情は筆舌では表現できません。明治天皇陛下より軍人勅諭が御下賜されて居りました。其の軍人精神を尊重致し、私達は満足して日頃の勤務に精励致しました。昭和二十一年一月御蔭で無事帰国できましたことを感謝致して居ります。
他国に内地で戦病死された戦友御遺族様に対しては、厚く厚く御礼を申し上げます。
乱筆乱文で失礼します。何の社会科学習の資料にもなりませんが所感を記しました。

ポナペ島にて

宮田与四栄（当時二十七歳）

昭和十八年九月八日再度応召、同日味噌蔵小学校に入隊し、約一ヶ月間同校に訓練し、十月十日金沢出発、十二月宇品出港、同二十二日南方ポナペ島に上陸、同三十日戦友はミレー島に向う。自分は残留部隊としてポナペ島に残る。
十九年二月十五日午前八時、空襲に遭い頭及び手に片貫創と指骨折の負傷、其の頃、食糧不足を来し、自活農園を開く。
敵機は一日三回から五回、空襲に来る。
八月頃米は無くなり、甘藷の輪切りと芋づるのゾウ水の為、毎晩、班毎に自活農園の芋の葉等を塩ゆでにし、それをみんなで食べた。そして、ここにはウイルス病が流行り、二十年二月同病人となる宿命に遭う。苦しい中にも頼りになるには戦友である。忘れることができない戦友の世話。
日時は明らかではないが、畏れ多くも天皇より自活農園のおほめの言葉賜る。そして、八月十五日の終戦。十二月二十三日戦友の霊の眠るポナペ島を離れ、帰国の為船上の人となる。
さらば友よ安らかに。

おわりに

たくさんの方々のご協力によって、貴重な体験を記録した「御祖戦争体験記録集」ができあがりました。

校下の皆様の熱してつきない平和への願いが、いつまでも子供達の心の中に息づき、燃えさかっていくことを願って編集しました。

この記録をもとに、また家庭でも子供と共に、戦争を語り、平和を考えていただけたらと思っています。

最後になりましたが、原稿をおよせくださった方々に心からのお礼と感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

昭和五十二年八月

御祖戦争体験記録編集委員会